

■私立漆工学校・静陵図案会・物産陳列館

○私立漆工学校

静岡の漆工芸も明治 20 年代より欧米文化の色が濃くなってきます。デザインや構図の追及が始まるものの、デザインの専門家がいたわけではなく、新風の漆工芸に理解と興味を持つ小栗常蔵らが、漆工芸界をリードすることになりました。

小栗は徳川家に随従した家臣団の一人で、狩野芳崖の門下でした。小栗は二番町に住み、漆工と蒔絵の弟子を集めて絵画を教えていましたが、明治 33 年（1900）に初代静岡市長星野鉄太郎を校長に迎え、三番町に私立漆工学校を設立しました。当時市内の有力な漆器問屋であった、中村嘉十、小沢誠一、岩本庄吉、海野善次郎、矢沢久右衛門らが設立に協力し、文部省の認可や助成に奔走しました。

当学校は、三年制で髹漆（漆工）、蒔絵、木工の三科を置き、指導陣には、東京上野の美術学校で学んだ萩原元次郎が漆工を、同じ美校出身の藤村彦四郎が図案を教え、蒔絵部長に酒井遷、塗りの部長に長嶋清吉などがいました。後に県立工業試験場からも技士などを迎えていましたが、明治 42 年（1909）に廃校となりました。

○静陵図案会

明治 33 年（1900）、当時静岡県立静岡尋常中学校教諭小栗常蔵（東京美術学校出身）の指導のもとに、中條重太郎、小林八郎、原田金吾等数 10 名が静岡漆器同業組合に集まり、毛筆画を学習していました。同志が増えるにつれ静岡漆器工青年会と名づけた会を組織し、絵画の学習と漆器図案の研究を行うようになりました。

明治 40 年（1907）会の名を「静陵図案会」と改名し、新たに会則を制定して新発足しました。会の目的として、「静岡市存在の蒔絵業者を以て組織し、ひろく工芸図案、特に輸出漆器の意匠図案の進歩改善を図り、これの研究製作をなすことを目的とする」とあり、以来、意匠図案講習会の開催、懸賞課題図案、漆器展覧会の開催、優秀図案の印刷配布等の事業の計画と実施を行いました。

大正 3 年（1914）市の徽章の懸賞応募があり、静岡の「葵に岡」の徽章は、会員の中川延次郎が応募、採用決定されたものです。

大正 10 年（1921）6 月、初めて長期意匠図案講習会が開催されました。これは従来実施してきた意匠図案研究を強化したもので、毎年一カ月夜間 3 時間、三カ年をもって修了するもので、後進子弟の基礎教育に重点をおくものでした。

大正 14 年（1925）5 月、天皇皇后両陛下ご結婚 25 周年銀婚奉祝にあたり、本会及び静陵漆器若葉会は、静岡県より献上衣装盆ひと組の製作依頼の光栄に浴し、大正 14 年 9 月 30 日これを完納しました。

この図案会の活動は、大正から昭和初期にかけて静岡の漆芸意匠に一つの流れを提起してきましたが、昭和 33 年（1958）に静岡木漆共同職業訓練所にバトンタッチされました。

○物産陳列館

静岡市は明治38年（1905）、「物産陳列館」を駿府城城代橋付近に建設しました。当館は地場産業の委託販売及び各種展示会からはじまり、技術講習会、県内、諸外国から参考品を購入し展示するなど次第に地場産業の発展にかかわる総合センターの機能を有するようになりました。

事業の拡大に伴い名称も「商工陳列所」、昭和5年に木工の発達に寄与すべく付属工作館を建設して翌6年には「商工奨励館」と改名しました。

しかし、この施設は昭和20年（1945）6月の静岡大空襲によって灰塵と帰りました。

昭和25年（1950）に開所された「工芸指導所」はその継承施設として安倍川町（現葵区新通）に建設され、静岡市特産品たる内外各種産業工芸品の質的改善と技術意匠の向上を図る目的で、商品生産のための研究指導や各種展示会を行ってきました。

その後建物の老朽化が著しく、時代の流れに沿った指導範囲を拡充するため組織、名称を改めて、昭和48年「静岡市産業工芸センター」が現在の駿河区中島に建設されました。

昭和53年（1978）ごろからは、不況から脱し景気が上向きとなり、静岡市内で開催される見本市、展示会などが増加してきます。特に地場産業関係の見本市は回を重ねるごとに大規模化して、従来使用していた市立体育館、駿府会館等では手狭になってきました。また、もともと展示機能を備えた施設ではないので利用上さまざまな制限と不便も感じていました。

これを契機に、積極的に地場産業の育成と振興を図るには、拠点となる専門展示場が必要であるとの機運が高まり、昭和57年（1982）静岡産業館がオープンしました。平成8年（1996）にはツインメッセ静岡として、展示場面積の増設と各種会議室等の充実を図り、今日に至っています。

一方で、平成3年（1991）J R静岡駅アスティ静岡内に株式会社駿府楽市を開設し、地場産品の宣伝・展示及び委託販売によって、「物産陳列館」の初期の機能を継承しています。

参考ですが、静岡県においては、明治39年（1906）漆芸及び紙業の試験研究機関として「県立工業試験場」を設立しています。

漆器部には、図案、描金（蒔絵）、髹漆（漆工）、木工の4科が置かれ、硬化透明彩漆による新しい蒔絵法や改良下地の発明など業界の発展を促す新技法を次々と開発しました。

図案科には、人間国宝であり静岡市名誉市民である芹沢銈介も在職したことがありました。工芸品の命は特にデザインであるとの考えから、図案科は漆器だけでなく、染色、玩具、家具、鏡台など広い範囲に渡って指導、実績をあげました。